

八月一日に岩手大学構内に盛岡市産学官連携研究センターがオープンする。また県・岩手大・岩手経済同友会が来年度「(仮称)いわて未来づくり機構」の設立を検討するなど、大学の「知」を産業界に活用しようとする県内の動きは活発だ。

二〇〇三年には若手ネットワークシステム(INS)が地域の産学官連携への貢献が認められて

いわての風

経済産業大臣賞を受賞するなど、本県における事業化支援は全国的にも高く評価されている。

だが、これが地域の事業者に真に寄与できているかどうかについては、やや心もとない点がある。創業時の支援を例に、そのあり方について、日ごろ感じていることを述べたい。

支援機関主催の創業セミナーで著名講師の口から

「あきらめない限り、失敗はない!」というデフォルメ(変形強調)されたフレーズが発せられる時、創業予備群や支援機関関係者の心は躍る。

しかし、この種のメッセージはもろ刃の剣で、事業意欲を持ちながら歩み出せない人への勇気づけには有用な反面、事業にウブな向きにとっては誤った動機づけの悪魔のささやきにもなりかねない。

事業には、それにかかる情熱の強さと設定目標に至るまで確実にプロセス(過程)を踏んでいく地道さの両方が必要とされる。しかし、極端なデフォルメ手法は片方のプロセスをおさなりにさせる危険性を秘めている。

私はここ十年ほど当地で創業者状況を観察して

事業経営に欠かせない「地道さ」

関 洋一 盛岡市・企業世話人



創業者支援継続的に

きたが、こうした刺激的な言葉に動機づけられ事業を立ち上げたものの、漠とした夢物語を追い続けて頓挫した悲劇の主人公は少なくない。

が次につながる前向きな失敗とがある。自動車メーカーのホンダには「失敗表彰」という制度があり、この制度を通して後者の失敗を認め、社員が委縮せず伸び伸びと前向きな仕事ができる環境づくりを目指している。

このやり方は、目標までの道のりを明確にさせ、段階を踏んで最終目標まで継続させる合理性や堅実性を高く評価している。

それに対して、過程軽視のデフォルメ手法は、「夢」だけに関心を抱く

むろん失敗の原因は、このことばかりではないが、大都会と違い、純でいちな県民性からして、その動機づけ効果が彼らにとって十分だったところは確かである。

意不足や準備不足といった必然的な失敗と、新境地に果敢にチャレンジしながら全うし得なかった

私には、日々事業者群の奮闘ぶりを目の当たりにし、また各機関所属の支援者たちの献身的な活動ぶりに触れる機会も多い。しかし、せっかくの努力もその向け先を誤ると、水泡に帰すばかりでなく、むしろマイナスに働く。

それを防ぐには、事業化支援はセミナー講師やコンサルタント、支援機

具体的には一過性のイベントセミナーなどの話題作りなどに腐心せず、事業者の軌道修正を含めた事業の立ち上げ前後やその後の継続的フォローに注力すべきなのだ。

それは、一時的に遠方から招くタレント講師に頼らず、自らが日常的かつ継続的にかかわり続ける仕組みと実力をつくり出すことが求められる。

一つの世でも成功者といわれる事業者群は、浮ついた一時の勢いだけでは事業が継続しないことを皆よく知っている。

たまた服用する栄養剤よりも日ごろの食事が人の健康に寄与するのと同じで、事業経営の健康づくりは普段からの地道な活動にあることを肝に銘じたいものである。

「夢」だけに関心を抱く

せき・よついち 52年紫波町生まれ。東京理科大学。商社勤務。誘致企業取締役、県中小企業支援センター・プロジェクトマネジャーなどを経て現在は中小企業大学校・高知工科大学大学院講師、盛岡市創業支援マネジャーなど。